

特集 集団生活でわかったこと

「大きいの食べたら」、「おれ、登る」

— 秋の山の実と子ども —

青木 孝安（財団法人育てる会 理事長）

A君、小学六年生で八坂生活二年目。B君、小学五年生で八坂生活二年目、八坂へ来た当初、喘息気味で苦しんだ。どちらかといえば気が弱く、いじめられっ子タイプであった。C君、小学五年生で八坂生活一年目。ぞっこん明るく極めて活発。長年他の団体の野外活動に参加してきただけあってすべて自信に満ちている。

十月末の日曜日、私はこの三人を連れて野外活動に出かけた。秋の紅葉というものは、日々の変化は誠に

微妙で、赤や黄色の色合が日一日と濃さを増し、その極に達した数日、一斉に光り輝き、霜の降下と共に灰色を帯びてくるのである。その日は正に、紅葉の輝きが最後の命を誇っているが如き日であった。

その日の子どもたちの目標は、太平というところにある、八坂村きつての古い農家を見学すること、更に足を伸ばし、藤尾というところにある古刹を見て帰るという、里程約十キロを越える山歩きであった。

因みに申し上げておきたいが、初等教育段階における野外活動では、子どもに与える活動目標と指導者のねらう指導目標が別のところにある場合が、えてして活動に実りをもたらす場合が多い。

この場合、指導者としての私のねらいは、子どもに秋の自然接触体験、特に、木の実、草の実とのふれ合いをねらっていたのである。子どもたちの古い農家や古刹を見たいという欲望を利用して、私は子どもたちの秋の自然接触をねらったのである。また、その頃、子どもたちは、収穫祭の折、父母に山の実の果実酒を贈るということで、秋の木の実に大きな関心を寄せていた。

このように、野外活動における指導者は、すべからず子どもたちに対して、策略家であり、仕掛人でなければならぬ。

さて、話を本論にもどそう。

三人の子どもを連れ、センターより三原という農場へ向かった。三百メートルばかり歩いたところで、ふと左側の木の上の方に、サクランボ状の木の実を発見した。逆光線であったので実の色はよくわからないが、私が一番探し求めていた「コクワの実」、正しくは「サルナシの実」ではないかと思われた。

経験のある人にはおわかりいただけるであろうが、秋の山で「サルナシの実」に出合った時の子どもたち

の動きは実に面白いものである。理由としては、サルナシの実は、秋の木の実の中でずば抜けて美味で芳香を放っていること、ツル性の木で、その実はだいたい木々の梢の方に群れてさがっているのである。そしてまた、そんなに高いところについているので、ありきたりの手段では絶対手に入らないというところ、そうでもないのである。つまり、実のついていない木の幹をけとばすと、熟した実はいとも簡単に落ちてきて、子どもたちのたむろしている周辺を、たちまちあの芳香が包んでしまうという、誠に困った？ 代物なのである。

さて、私は目の前のそれらしき木の幹をゆさぶってみた。たちまち、ボトンボトンと二、三の実らしきものが、草むらに落ちた。そして、あのえもいわれぬ芳香がただよってきた。

「よし、おれが行く」、といったのは六年生のA君。やや細目の日本のナラの木（だったと思うが）に両足をふんばり、よじ登り始めた。すでにあちこちにボトン、ボトンと落ち始めた。一つ拾って食べた。B君とC君は「ウマイッ」の発見。樹上では、A君が直接手に取った実を、自分では食べず、盛んに下にいる二人

の仲間にと落ちてくれる。二人はそれをビニールの袋にためた。

「A君、お前も食べるよ」といっても、相変わらず、地上に落としてくる。

一通り取り終わったA君は、やがて地上に降り立った。C君が私に「ハイッ」といって、サルナシの実の入ったビニール袋を差し出した。目の上にかざすと、小粒な実の中に、ひときは大粒の見るからに美味そうなのが一つあった。「先生も食べなよ」とA君。私はせっかく子どもたちが取ったものであることを思い、遠慮ぎみに、小粒なものを一つつまもうとした。するとA君が、

「一番大きいのを食べたなら」

と、そして他の二人の子どもの心地良い賛意も、無言の中に伝わってきた。

「なんとさわやかな子どもたちであろなか」と、私は思った。

ガマズミ、山ブドウ、ナツハゼ、コナシ、ムラサキシキブ、そして不明な木の実を集めつつ、山の稜線を

越え、大平の沢から藤尾の集落に出た。陽気な会話がとめどもなく続いた。藤尾を過ぎ、相川の集落に向かって急坂を登り始めた頃、右手の山の斜面に、正に食べごろに熟れた「コガキ」（マメガキ）を発見した。「それ、果実酒の新種ができるぞ」といって、私は先頭を切って山の斜面をよじ登った。

三人の子どもも私の後に続いた。藤尾あたりから、風邪ぎみで喘息風の咳を繰り返していたB君も負けじとついてきたではないか。

コガキのもとについてみると、下の路上では低く見えたカキの実も、意外と高く、とても手の届きそうなところにはなかった。私が「また登らなけ」と、いしかけたとたん、なんと、ゴホン・ゴホンと咳をしていたB君が、間髪いれず、

「おれ、登る」

といって、柿の木にへばりついた。瞬間、他の二人はそれを認め、一歩引き下がった。

「気をつけろ、柿の木は折れるぞ」といったとたん、B君の左足の小枝が折れた。B君は登ることも、下りることもできない状態になった。それにしても、よう

やく、実のついた一本の枝を手に入れ、B君は私の手を借りて、地上に降り立った。B君は、また咳をはじめた。

集団生活によって、子どもたちが身につけるものは大きい。そして、今日の子どもたちに、この体験が欠けていることも確かだ。青少年の社会教育において、指導者は集団生活プログラムを大幅に取り入れる必要がある。

それと同時に、指導者は、子どもたちが集団生活によつて変容していく節と、その行動実態を適確に把握していく必要がある。

樹上から惜し気もなくサルナシの実を投げ与え、「食べてごらん」と口ずさむA君の口と手に、「おれ、登る」と間髪入れずに行動したB君の手足に、私は集団生活の、確かな実りを実感した。



八坂で学んだこと

片倉 正隆（森村学園初等部教諭）

夏の日の思い出

「先生、ビニール袋、ちょうだい」

息せき切つて、教室にとびこんできた男の子の手の中で、大きなカマキリが、ひつしに、カマをふりあげています。

「わあー、ずいぶん大きなカマキリをつかまえたんだね。でも、殺しちゃいけないよ。よく見たら、にがしてやるんだよ」

「はい、わかつてまーす」

私の手から、ビニール袋を受け取るのも、もどかし気に、生徒は、また、外に飛び出して行きます。

都会の喧騒の地から、まだ、自然の営みの多く残されている横浜市緑区へと、学校を移して以来、毎年、夏から秋にかけてみられてきた光景が、今年も私の受け持つ三年生の教室で、毎年のようにくり返されています。

ビニール袋を片手に森の中に走りこんでゆく生徒の

姿を目で追いながら、私は、あの夏の、八坂での日々を思い出していました。

同僚からの誘いを受けて、育てる会の野外活動に、リーダーとして、初めて、参加したのが去年の夏。そして、二回目のこの夏も、山村生活四期のリーダーの一人として、子どもたちと共に一週間を八坂村で過ごしました。そこで得た経験、感じたこと、考えたことは、実に様々な内容を持ち、未だ整理のつかぬままに、思いを深めるべき問題として、私の胸の中に渦巻いていたのです。

八坂の日々の一こま

先にあげた、「虫の生命」についても、八坂の生活の中でふれたことがあります。

それは、四期の日程の中の五日目、すでに三つの班に分かれて、農家に泊まっていた日の夕食の席で、子どもたちが口々にその日の行動について話しているときでした。男の子の一人が自分がその日どんな虫をつかまえたかを、そしてどんな残酷な方法で殺したかを得々としてしゃべりだしたのです。私の受け持った班

は総勢十二名。中学二年生の男子を頭に小学校五・六年の男子、一年から四年までの女子、最年少は幼稚園年長の男の子という編成でしたが、一座の注意はその話に集中し、特に幼い子どもたちは食べ物を口に運ぶことも忘れて、息をのんでそれに聞き入りました。

話が、さらに広がりそうになった時、私はそれを中断させ、その中に割ってはいりました。

「A君、きみはその殺した虫をどうしたの？ そのまま捨ててしまったのかい？ それなら、もうそんな話は聞きたくないな。ここは食事の場だ。気持ちの悪い話や汚らしい話題は避けなくてはいけない時なんだ。それに、意味もなく、生き物を殺すのは、いけないことなんだよ」

それから私は、かなり長いお説教をしてしまいました。野獣が無益な殺生を決してしないこと、私たち人間も他の生命を奪うことで存在していること、そして、そのことに畏敬の念をもたねばならぬこと、自分でも思いがけないほど、熱意をこめて話した後、私は次のような言葉で話をしめくりました。

「人間の生をおびやかすものを殺すことはしかたが

ない。病原菌を薬で殺すことや、ハエや蚊をたたきつぶすことは自分を守るためだから、しかたがないことだね。でも、トンボやカエルは、きみにどんな悪さをしたのかな？ 何もしていいないよね。きみは、そういうものを殺さなくてはいけない理由があったのかな？ そうではないだろう？ ぼくたち人間は、牛や豚などを殺して食べている。でも、それは、ぼくたちが生きるために、しかたのないことなんだ。だから、自分に害のないものを殺したら、『ごめんなさい』という気持ちをもって、それを食べなさい。カブトムシやクワガタも、わざと殺したのなら食べなさい。皆も明日から必ずそうすること」

この宣言は、翌日、マムシを食べることで早々と実行されたのですが、私は自分が親として、このような話を我が子にしてきたのだろうかということに、こたわっていました。

一週間の父親として

八坂村で一週間の、私は日常の自分とは比較にならぬほど父親的でした。モラトリアム人間の典型を自分

に見る私は、すでに、四十才をはるかに越し、大学生と高校生の娘を子として持ちながら、父親という言葉に己にあてはめて考えることのしにくい精神状態で、これまでの日々を過ごしてきたように思えるのです。しかし、この夏の八坂での生活は、そのような私を嫌が応なく、父親にさせずにはおかまいような状況になりました。

己の存在と分かち難く結びついている子ども、しかも同時に、己から分離していくべき子ども、そのような子どもに向かい合う父親は、子の言動を理解しつつ規制する、あるいは庇護しつつ突き放すという矛盾した役割を担わなければならない存在だといえましょう。

会の活動の趣旨に添うべく、私は先ず、子どもたちを突き放し、自然の中に追いやることから始めようと考えました。

八坂での第一夜「明日から、きみたちは自由だ。自分の行動の予定を自分で決めなさい」八坂村とそこで展開し得る活動の概略を説明した後、子どもたちに、このように投げかけをしました。

子どもたちは、各々に考え、様々な思いつきを口に

はしてみたものの、自分の意志で、自分の行動を決めるまでには至りませんでした。

長い相談の結果、釣りをすると決めた数人の子を除いて、他の大多数がリーダーと行動を共にするということで、翌日からの活動が始まり、私たちの目論見は、あつけなく、はずされてしまったのです。

自由を求めているようでありながら、いざ、目前にそれをつきつけられると、あわてて規制の中に逃げ込む姿勢をとることは、管理化社会が定着したといわれる現代にあつて、子どもたちだけが示す傾向ではないのかもしれない。

しかし、さらに、今の子どもたちの特徴をあげれば彼らは管理の枠内にいて、わがままを通そうとしていることだといえましょう。守られたいと望んでいながら、守ってくれるものに反発する、あるいは、反抗はしても、守ってくれるのが当然だとする甘えた態度が子どもたちの言動の随所にみられるのです。

自分より幼い子たちから集めたおかずを寢床に持ち込もうとする男の子を叱りつけ、甘え泣きをして、テントに入ろうとしない女の子を女犬原の闇の中に突き

放すなど、リーダーとして、あるいは現実原則を子に課す父親として、厳しい態度で臨まねばならぬ場面に、度々、立ち会わねばなりませんでした。

しかし、考えてみれば、このような表れは、山村生活という集団行動の中であつたからこそ、鮮明にみられたことなのかもしれません。充分に保護の手がゆきとどいた都会の核家族の中にあつては、自らを律する必要もないほどに、子どもは守られ、また規制が先行する学校教育の場では、管理に反抗するほどの余裕も与えられていないとも考えられるからなのです。

自律が自分の必要条件であることを考えれば、時には子どもたちにとって、辛く、厳しい経験であつたかもしれない八坂での日々は、彼らの成長に資する貴重なものを含んでいたようにも思えるのです。

そして、一週間限りの、仮りの父親として、私が果たしてきた役割も、決して無駄なものばかりではなかったとも思えるのです。

一週間の教師、そして、生徒として

八坂での一週間の生活は、学校の教師としての私に

も、多くのことを与えてくれました。新宿駅で初めて出会った子どもたちと、その日から寝食を共にするという経験は、学校で接する生徒たちを通しては知り得ぬ、様々な教訓を与えてくれました。

本来ならば、それをこそ、報告すべきだとは思いますが、内容があまりにも豊富で、未だに整理がつきかねています。しかも、もう、紙数もつきてしまいました。そこで、最後に生徒としての自分と子どもたちにふれて、筆をおきたいと思います。

今年も、勝野大さんのお宅に泊めていただき、おばあさまから、わら細工を教えていただきました。そこでは、おばあさまは、本当の先生でした。文字通り、手を取って教えて下さいました。

「おばあちゃん、ここ、どうやったらいいのですか」。ふだん言葉遣いが悪く注意ばかりされていた男の子が、自然に、ていねいな言葉を使っています。真剣な、とてもいい表情をしていました。

本当の力があれば、人を自然に導くことができる。教師としての私は恥ずかしく、生徒としての私は、学ぶことの喜びをかみしめていました。

集団生活で学ぶ

― 本物を「育てる会」 ―

神山 昭子（元小学校教師）

出発

「おかあさん。おかあさん…」

「ちよつと顔、見るだけでいいんだから…」

顔じゅう涙でぐじょぐじょ。泣き叫びながら母親を探し求める信ちゃんをはがし締めにして押し止める私。七月三十一日、幼低組、新宿駅ホームの光景である。

発車後十分もすると、泣きじゃくりは納まった。三十分も経つ頃には、姉さん株のかな絵ちゃんとしやべったり、じゃれたり、そのうちにシートの上でころげ回り、さっきの涙は汗に変わった。

他の子どもたちは、と見れば、昼食で満たされたおなかをさすりながらトロリとしている子、友達を物色しながらちよつかいを出している子、これから捕まえるであろう虫を思いながら図鑑を見入っている子、虫捕網をしっかり握りしめながら仲間の動きを観察している子、先生にペッタリついて甘ったれている子、も

うすっかり仲良しになつてはしやぎ回っている子、連れだつてトイレに行く子…そこには、不安や親を求める顔はなかった。

三十分前には、東京、千葉、埼玉、神奈川、静岡、愛知の都県から集まつた、ほとんど初対面といつてよい子どもたちであつた。年齢も四才から八才、これから親の手元を離れ、三泊四日（実際には台風の為、四泊五日）の生活が始まるのである。

教職三十余年の中で、宿泊を伴う学校外での学習は何度も行つたが、それは、いつも五、六年生の高学年の児童であつたし、数ヶ月から一年以上も教室で生活を共にした関係の集団であつた。

そう考えると、何か重いものがずっしりとのしかかつてくるような気がしたが、無邪気な子どもたちの表情を見ていると何ともいへぬ胸の高まりを覚えた。

汽車は快適に長野県、松本に向かって走っている。大町駅が近くなる頃から雨が降り出した。車窓の両側に山が迫ってくる。

芽生えた集団意識

雨のホームに降り立つと、かな絵ちゃんが人員点呼、確実であつた。整列も新宿駅でのとは違い、真直に、しかも早く並ぶ。ばらばらであつた気持ちが始めたのである。ずっしりと重いリュックを背負つて列も乱さずしつかりとした足取りで歩いている。四才児の剛ちゃん、五才児の信ちゃん、保史ちゃんも弱音を吐かない。個人の旅で、これだけの力が出せるものだろうか。

駅前に出迎えてくれたマイクロバスに乗り込む。一年生の綾ちゃん、順ちゃん、寛ちゃん、無双・史郎・賢ちゃんたちは、弟分たちを良い席に座らせるのを当然だと思つている。可愛い、しつかり者の由美ちゃんは、後部の荷台上がりこんだ。つづら折りの山道をバスは二十分上がつていく。折れ曲がる度に由美ちゃんの体が大きく揺れる。揺れる体を両手でしつかりと押さえる。目と目がかちつと合う。いたずらっぽく笑い合う目の中に心の通いを感じる。雨で日はとつぷり暮れているが、ライトの光に畑や杉の林が流れていく。車はあえぎながら上がつていく。

「あれがセンターですよ」

運転手さんの声にほつとする。この地で一番高い、村を見晴らす位置に建てられたセンターから、やわらかい光がもれている。雨はますます激しく、ひんやりと肌寒い。

先着の先生方が出迎えてくださる。靴箱を確認し、二階まで荷物を担ぎ上げる。学校での甘えた集団では、時として不平をもらす者もいるが、ここでは一人もない。

鋭く光る稲妻と轟く雷音の中で入園式が始まる。八坂での生活を楽しく、やさしく話される児玉先生。子どもたちの目は輝く。

おや！ 順子ちゃんは一 いました！

班の一番後ろに、両膝をきちんと揃えて座っている。新宿駅を出発する時に並んだ順はくずれない。名古屋から大町に着いた順子ちゃんは、暗いバスの中でこの集団に出会ったばかりで、この中に入る事が出来ないでいるのだ。三年前のアメリカ勤務を終えて帰国した教え子だった両親が、子どもの登校拒否を悩んで相談に来たのは二ヶ月前、どうしても学級の集団に

入りこむことが出来ないと言う。順子ちゃんの場合だって大同小異。ここで指導を誤っては大変。入園式解散後、三階の畳の部屋に移動する時に、「順子ちゃん、こつちよ」と、しつかり手をつないで階段を上った。順子ちゃんの手は温かった。夕食のとき、改めてみんなに紹介し、彼女の存在位置をはつきりさせる。

村を探る

次の日は、朝から雨だった。学校の林間学校や移動教室であつたら、室内の雨の場合のスケジュールに切り替えてしまう。子どもたちは、村を探検するといふ。それぞれにビニールのマントを着たり、傘をさしたりして、弁当の入ったナップザックを背負って出発！車を心配することのない道を歩く。途中、葉かげに羽を休めている蝶やカナブンを見つけては歓声をあげる。そつと体を屈めて野いちごを摘みとっている女の子の頬は紅い。左手は山肌。右手は崖下に木が茂り、霧の間に遠く畑が見える。元気のよい男の子たちがスパーマンのようにマントを開け、傍を走り抜けていく。暫く走ってくるりと向きなおると、「オーイ」

「オーイ」と叫びながらみんなの来るのを待っている。それぞれの心のままに、それぞれのテンポで清く澄んだ空気を胸いっぱい吸いながら、山道を曾山神社めざして歩いた。

「オーイ、こつちに湧き水があるぞ!」

「ワー冷たい! 先生、飲んでもいい?」

こんこんと湧き出る泉の水で手を洗い、神楽殿で昼食をとった。帰り道も雨は止まなかったが、弱音を吐く者は誰もいなかった。

ホームシック

夕食の配膳が済み、いよいよ食べる、という時になつてA子ちゃんがシクシク泣き出した。雨の中を歩いたので、熱でも出したのかと額に手を当てたが熱くない。

「よしよし、先生と一緒に食べようね」

こつくり額いたが食欲はなかった。

「さあ、きのうのようにお布団敷くのよ。上手、上手! オシッコに行くのも忘れないで!」

みんな機嫌よく布団を敷き(みんな家でもこんなに

上手にやるのかしら)もぐり込む。

はしゃいで、ちよつかいを出す子、ヒソヒソしゃべったり、笑ったりする子。座敷の真中にデンと座つて静かに寝つくのを待つ。あちこちから安らかな寝息が聞こえるようになった頃、グツ・グツと鳴咽が聞こえてくる。四才児・剛ちゃんかを見ると、彼は大の字で熟睡している。いた、いた! みんなに知られないように、そつと泣いているBちゃん。

「よし、よし」と、そろりと布団の中にもぐり込んで添い寝。静かな寝息が聞こえるまでには、そう時間はかからなかった。

鷹狩山登山

下界は台風で雨だというのに、八坂はからりと晴れている。新聞紙をぎつちり詰めた運動靴はすっかり乾いて履き心地がよい。きのうの風で落ちた木の葉を踏みながら歩くと、日の光に誘い出された赤トンボが群れている。捕虫網が忙しく動く。

「さあさあ、歩いて、歩いて」の声も耳に入らぬ様子。右に折れると山のごろごろ道に入り、木陰も出でく

る。二年、三年組の圭一・州平・幸嗣・尚弘くんたちは体力もあるので、虫かごを賑やかにしながらも先頭集団に入っていく。一年組もがんばる。幼児組も弱音をはいかない。かな絵ちゃんの虫かごは満タン。由美ちゃんは幼児組の手を引く。私は、フーフー。

頭上を極めた後、土の感触を素足に受け止めながらジャガイモ堀り。ゴロゴロと頭が出る度に歓声が湧く。リヤカーいっぱい収穫！豊かな自然の中で、力いっぱい、のびのびと過ごした一日だった。今夜の寝つきは早いだろう。

集団の中で育つ子

わずかな五日の間であったが、子どもたちは友達をつくり、自然を満喫した。配膳も布団敷きもした。疲れても、喉が渴いても、母親に会いたくても我慢した。荷物の整理も自分でした。幼くても自分の事は自分でやった。出来るだけ手はかさなかつた。

数日後、長期山村生活班の子どもたちと生活を共にして驚いた。掃除・配膳・食器洗い・薪割り・風呂炊き・洗濯：何でもする。角材を三十分もかかって切り、

なたで割る。火ふきで一時間余りかけて風呂を焚く。薄暗い裸電球の農家暮しを、小一から中一の子どもたちが堂々とやっている。白馬登山、ヨットの操作、飯盒炊き、畑仕事…。十七日間の集団生活である。

都会の子どもにもこんな力があつたのだ。集団の中で引き出され、育まれる力の偉大さと、学校教育の甘さを感じずにはいられなかつた。

自然の中での「体験活動」に初めて参加した私は、自然にも優る子どもたちの集団での活動に感動を覚え、ずにはいられなかつた。



再掲載を受けて――

集団生活で分かったこと

稲井 祐介（現・山村留学指導員）

過去の特集記事「集団生活で分かったこと」を読み、まず思うことは、子どもたちが集団で生活・活動する様子に今も昔もそれほど大きな変わりはなく、集団生活において子どもたちが学び得ることは普遍的なことだと思います。

しかし、令和三年現在は、情報機器が劇的に発展・普及し（情報化）、自然や広場といった遊び場が減少し（都市化）、さらには少子化や核家族化が進んでいること等、過去の記事が掲載された昭和五十七年に比べると、子どもたちを取り巻く環境は確実に変化しており、子どもたちの姿も少なからず変わってきていると思います。ゲーム等の仮想現実の中で、一人で遊ぶことが増え、複数名と一緒に遊んだとしてもオンライン。実際に相手としての人との関わりが減少し、コミュニケーション力の低

下が叫ばれています。そうした現代において、集団生活体験、殊更異年齢の集団による生活や活動の体験は、昔以上に子どもたちに必要不可欠な体験であると言わざるを得ません。

情けは人の為ならず

集団生活を通して子どもたちが学び得ることは数限りなくあります。人进行い遣る大切さやその心地よさ、切磋琢磨する負けん気や向上心、集団の中で意見する勇氣、周りと妥協する協調性や自律心、その時々周囲の空気を察する力、友達と衝突するイライラと仲直りした時の爽快感、モラルやマナー等の社会性や社会の規律等、枚挙にいとまがありません。というのも、集団生活における全てが学びになり得るからです。その中でも、私が特に大切にしたいと思うのは、相手を思いやる姿勢（気遣い）です。集団生活を送るためには、根底に必要なものだと考えています。

私が勤務している大田市山村留学センター『三瓶こだま学園』では、現在十五名の小中学生が山村留学生生活を送っています。最低でも一年間、継続生ともなると数年間、生まれも育ちも違う異年齢の子どもたちが集団生活

を送りますので、そこには当然トラブルもおきます。その多くは人間関係です。一年間という長丁場なので、気が合わない人とは関わらないという訳にはいきません。関係がうまくいかない間柄によくあるのは、それぞれの悪い部分しか見えていない負のスパイラル。これを打破するのは容易ではありませんが、ちよつとした気遣いが好転するきっかけとなることもあります。

年度のはじめ、私は子どもたちに「情けは人のためならず」ということわざを伝えます。恥ずかしながらこのことわざの意味を、私は大人になるまで「情けをかけることは人のためにならない」と誤解していました。しかし、正しい意味を理解した時、実際に子どもたちと集団生活を送っている私自身、とても腑に落ちるところがあり、子どもたちにも是非正しく意味を理解し、実践してほしいと思いました。

“人に親切にすれば、その相手のためになるだけでなく、やがては良い報いとなって自分にもどってくる”

私の実体験として、人に優しくされたら嬉しくなりまし、今度はいつか自分がその人に恩を返そうという気持ちになります。こうした経験を積み重ねることで、人

との好循環が生まれ、人間関係が良くなり、ひいては集団生活がうまくいくようになりますと私は考えています。

『混乱期』が大切

一年間の山村留学では、集団生活を行うだけでなく、よりよい集団を目指すことも大切です。心理学者のタツクマンは、チームビルディングを行う中で、五段階のステージ（形成期、混乱期、統一期、機能期、散会期）があると提唱しています。混乱期は、チームの目標や各自の役割、責任等について意見の対立がおこる時期です。うまくいかないことが出てきて大変ですが、意見をぶつけ合いながら、お互いを理解していく重要な時です。ここで事なかれ主義になってしまうと、表面上では仲が良くても、本音では不平不満が募り、集団としての機能は十分に発揮されなくなってしまう。よりよい集団を作るためには、対立や衝突を恐れずに、本音で対話することが大切なのです。

しかし、言うは易く行うは難し。集団生活の中で子どもたちは様々な葛藤を抱えることでしょう。そんな時、子どもたちに寄り添い、悩みを共有し、時には鼓舞激励することが、我々大人の役割ではないでしょうか。